

令和 2 年 6 月 7 日現在

機関番号：33912

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04819

研究課題名(和文) 幼児の音楽表現評定尺度の開発

研究課題名(英文) Development of a musical expression rating scale for young children

研究代表者

横井 志保 (YOKOI, SHIHO)

名古屋学院大学・スポーツ健康学部・准教授

研究者番号：10352858

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：音楽家による「音楽する」とは、どのようなことかを半構造化インタビューした結果、演奏する自分以外に聴き手がいて、その存在が音楽していると実感させる。また、そこに高揚感や緊張感といったものが伴うことであることが明らかになった。また、保育者の音楽的表現の捉え方の調査からは、自主性、創造性、協同性、躍動性、規則性の5因子を抽出することができた。さらに、幼児の音楽的な表現場面においては、子どもが音楽を能動的に捉え、感じることで、その表現の仕方にも変化がみられるようになり、音楽する身体には音楽を能動的に捉えることによって生じる前のめりな動きや予備的な動作となって現れる動きがあることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の特色は、幼児の音楽的な表現を音楽家と、保育者との両者の立場の視点から評価し、音楽表現評定尺度を開発しようとする点である。幼児の表現には、幼児が無意識に行う音楽的な表現から、音楽しよう意識的に行う表現とがある。楽器を使った表現は、様々な側面を含むものであるが、幼児が音表象を保持し、自ら音楽的時間の持続をつくることができるようになるということには、単独で音楽するのは違い、他児やその音に反応すること、また表現における身体運動的感覚とも連動する。つまり、音楽表現評定尺度の開発によって、表現すると同時に消えていく幼児の音楽的な表現を保育者が的確に捉えることに繋がる。

研究成果の概要(英文)：As a result of a semi-structured interview about what "musical" means by a musician, I feel that there is a listener other than myself who plays, and that existence is music. In addition, it became clear that there was an uplifting feeling and a feeling of tension. In addition, from the survey of how nursery teachers perceive musical expressions, we were able to extract the five factors of autonomy, creativity, cooperation, vigor, and regularity. In addition, in the musical expression scene of young children, when the child actively catches and feels the music, the way of expressing it also changes, and the musically body actively catches the music. It was suggested that there are some movements that appear as premature movements and preliminary movements caused by the above.

研究分野：幼児教育

キーワード：音楽的表現 幼児 保育

## 様式 C-19, F-19-1, Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

幼児の日常生活において音楽的表現、中でも楽器を使用したような表現や遊びは自然発生的には難しく、また継続しにくいと一定の保育者の指導や援助を必要とする。よって、その影響は大きい。そこで研究代表者は2001年に、保育現場において行われている器楽活動の内容と使用されている楽器の調査、またその活動に対する保育者の意識調査を行った。その結果、日常の幼児の興味や関心とは関係なく、器楽活動は行事のために行われており、保育者は行事のための活動ではなく、幼児の興味・関心に近づけようとしているが、適当な方法も見つけれないまま、その活動に疑問を持ちながら行っているということが明らかになった。研究代表者も保育者時代に同じ悩みの下、活動を模索しながら行っていた経験が本研究の発端となっている。

幼稚園教育要領、保育所保育指針の表現のねらいの(2)には、「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。」とあり、幼稚園教育要領の表現の内容(6)には、「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。」とある。

そこで、研究代表者は幼児が保育者と共に音楽することを楽しめ、高度な操作性や技術を必要とせず、かつ幼児が音楽していることを実感できる打楽器に着目し、実践的な研究を重ねてきた。

一般的に幼児の器楽合奏で用いられる楽器のほとんどがリズムを打ち鳴らす打楽器群で占められているが、それら一般的に保育現場で用いられている楽器は、奏法や型が決められており、保育者もそれを絶対としていることから、幼児の自由な表現を引き出すのに十分とは言えない。よって、楽器でないモノ(以下、音具と呼ぶ)を‘たたく’ことから生じる活動から、生き生きとした幼児の表現性を引き出すことを試みてきた。音具の選定には、幼児が扱いやすく、また保育者が簡単に手に入れやすいモノで、なおかつ音にこだわった。聴いていて耳障りにならないような和太鼓に似た温かみや厚さ、たたいた時の‘かえり’があり、手で直接たたいても撥を使用しても支障が無い、フラットな面があり、側面等をたたいて音の探索をすることもできることを選定条件に探した結果、ポリプロピレンによる7lのバケツが最も適切であった。他に、アクセントとなるスチール製のごみ箱や木製の箱や段ボール箱も音具として選定し使用してきた。

### 2. 研究の目的

幼児がモノと関わり遊ぶ中、音の探索と発見をすることで表現を生み出すことが認められ、そのような表現の生まれる環境・表現発生の様態に関する研究の蓄積がある一方で、表現を‘させる’指導や援助を避けたいという思いが保育者の援助を曖昧にしている。音で遊ぶ環境を準備することに留まらず、保育者がモデルとなって見せつつ援助することは幼児の持つ表現するイメージを引き起こし、動機となる。しかし、多くの保育者は、活動そのものを評価する時に、幼児の表現が音楽的であるかということよりも、幼児が楽しんでいるかどうかで評価している。幼児の原初的な表現を保育者がどれだけ「音楽」として捉えることができるかが、幼児の表現の支えとなり、自然な形で「幼児のしたい表現遊び」と「保育者のさせたい音楽活動」がイコールとなり、行事が遊びの延長上に位置付くことになる。

以上のような研究経過と問題意識から、本研究は幼児の簡単なリズム楽器を使った表現遊びを、保育者が「音楽として捉える」ことができる指標となる評定尺度の開発を目的としている。

### 3. 研究の方法

本研究は概ね以下の5つの段階を経ながら研究を進めた。

#### (1) 「音楽する」とは何であるのかを明らかにする調査

音楽を専門とする研究者や演奏家に「音楽する」または「音楽している」とは、どのような状態や条件があるのか、インタビュー調査により表現の指標を明らかにした。インタビューは研究代表者と研究分担者(五十嵐)で行い、録音、プロトコル化(テープ起こし業者に依頼)し、研究代表者と研究分担者(五十嵐)でSCATによる分析を行った。

#### (2) 保育者の「音楽する」視点による捉え方の調査

保育者は表現遊びを「音楽する」または「音楽している」と、表現のどこを捉えているのか。保育者の観点で「音楽する」とは、どのような捉え方であるのかを明らかにした。

保育者を対象とした表現活動の捉え方については質問紙調査によって既に明らかになっているので、「音楽する」または「音楽している」という視点で研究代表者及び研究分担者(五十嵐)が実施する研修会参加の保育者らを対象に質問紙調査を行った。音楽表現に関わる分析は研究代表者が総括し、研究分担者(五十嵐)と行い、統計的分析は研究分担者(高瀬)が中心となっていた。

#### (3) 幼児が「音楽する」とは

研究1, 2の結果から、幼児が「音楽する」とは、どのようなことであるのか音楽関係者視点、保育者視点の両側面から検討し明らかにする。

#### (4) 幼児の音楽的な表現場面の収集

幼稚園、保育園にて保育者と共に行う表現遊び場面や、研究代表者らの行う実験的な実践を映像記録として残し、事例の検討を行った。表現に関わる問題意識を明確にするためにも継続的に実践を行った。

#### (5) 幼児の音楽表現評定尺度の開発

研究(3)の結果を基に幼児が「音楽する」または「音楽している」ことを的確に捉えることができるよう、研究(4)で収集した実践場面と照らし合わせながら幼児の音楽表現評定尺度を作成する。

### 4. 研究成果

#### (1) 「音楽する」とは—音楽家による捉えから—

音は表現した瞬間、鳴らした瞬間から消えていく。保育者は、その一人一人の子どもの表現を瞬間瞬間捉え受け止めなければならない。本研究は様々な側面を持つ子どもの表現を「音楽する」「音楽している」瞬間に焦点を当て、保育者がその表現を的確に捉えることができるようになるために、「音楽する」「音楽している」とはどのようなことを指しているのか、またどのような条件があるのかを明らかにすることを目的としている。

マリimba奏者であり幼児や大学生等に音楽を教えている教育者でもある2名を対象とし、それぞれ2017年12月、2018年1月に半構造化インタビューを行った。インタビュアーは横井が行い、時間はおよそ2時間であった。インタビューはICレコーダーで録音し、逐語録を作成した後、本研究のような小規模な質的データから構成概念を導き出すのに極めて有効な手法であるSCAT (Steps for Coding and Theorization) 2)にて分析した。

インタビューの主な内容は次の通りである。①音楽を始めたきっかけ②演奏会時の最初の音を出す時の感覚③演奏中の自分の音楽をどう聴いているのか④演奏中の楽器の存在⑤音楽に影響を及ぼす転機はあったか⑥音楽していると感じられる時について⑦ソロとアンサンブルにおける音楽的な感じ方の違い⑧子どもが音楽を楽しむには

##### ①ストーリーラインよりM氏の音楽している状態について分析した結果

SCATによる分析の結果ストーリーラインより音楽している状態についての部分を抽出した。パフォーマーとしてオーディエンスと会場の両方を理解し、一体感を持って音楽したい。それらとの信頼関係で演奏会が成り立つ。それは、大きな拍手によって良い演奏となり鏡の様に映し合う関係となる。そして、高揚感がM氏を音楽していると感じさせ、誰かと共に音楽することにおいて、より強く音楽していると実感し、アンサンブルは音楽に陶酔させ、より没入する。

##### ②ストーリーラインよりK氏の音楽している状態について分析した結果

非日常的な集中力の高まりと、演奏を客観的に捉える力が同時に作用した場合であり、またそれは同時に緊張感を伴い、聴き手がいる状況においてのみ成立する。

##### ③両者のストーリーラインより共通する音楽している状態について

演奏する自分以外に聴き手がいる、オーディエンスの存在が音楽していると実感させる。また、音楽をしていると感じさせる条件として、聴いてくれる人がいて、そこに高揚感や緊張感といったものが伴うことであることが明らかとなった。

##### ④子どもが音楽を楽しむには

両者のストーリーラインより子どもが音楽を楽しむには、音を出そうとすることや音のイメージを持つことが音楽の楽しみとなり、日常生活に音楽があり、音楽が意識する存在でないことが望ましく、強制したり抑制することのない環境で音楽できることが望ましい。また、大人(保育者)の受容的な態度や子どもが楽器に向かう姿(体や動き)を注意深く捉える必要がある。そして、良い音を鳴らすためには試したり、良い音が鳴る持ち方、打ち方を示したり、一緒に探ることが大切であることが示唆された。

#### (2) 幼児の音楽的表現に対する保育者の捉え方の調査

本研究は、幼児の音楽的表現の捉え方が保育者の属性(保育職の経験年数と音楽理解度)によってどのように異なるかを明らかにするものである。愛知県内の保育者に対して質問紙調査を行い、子どもの音楽的表現を捉える視点についての回答を因子分析したところ、「自主性」「創造性」「協同性」「躍動性」「規則性」の5因子を抽出することができた。その後、保育者の経験年数と音楽理解度を基に分散分析および多重比較を行ったところ、11年以上の経験がある保育者は、自主性や規則性に関する視点から子どもの音楽的表現を捉える傾向にあり、音楽理解度の高い保育者は、創造性や協同性に関する視点から子どもの音楽的表現を捉える傾向にあることがわかった。

#### (3) 幼児が「音楽する」とは

本研究については継続中である。

#### (4) 幼児の音楽的な表現場面の収集

愛知県内の私立N幼稚園において、2018年5月7日より12月17日まで8月を除いて、週に1度30分~40分間、合計21回の実践を行った。対象は5歳児~満3歳児の合計42名で、保育者が2名子どもと一緒に加わった。実践の内容は、ピアノ演奏に合わせて歩いたり、駆け足

したり、スキップ等して身体を動かしたり、手拍子を打ったり、歌いながら歌についている振付を踊ったりした。実践者以外の保育者も子どもが音楽している状態を客観的に捉えることができるように実践の記録データを分析した結果、子どもの音楽する身体について以下の 2 点が明らかになった。

1. 聞こえる音楽と全く同じタイミングでなく、動きや身体に微妙な前のめりのズレが生じる。
2. 音楽という一連の流れの中で動く身体は予備的な動きを伴う。

子どもが音楽を能動的に捉え、感じることで、その表現の仕方にも変化がみられるようになる。音楽する身体には音楽を能動的に捉えることによって生じる前のめりな動きや予備的な動作となって現れる動きがあることが示唆された。

#### (5) 幼児の音楽表現評定尺度の開発

研究(2)で明らかとなった結果から、音楽表現評定尺度の開発のために再調査の必要が認められ音楽表現評定尺度は現在開発中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 横井志保・五十嵐睦美
2. 発表標題 保育における音楽的表現の捉えに関する研究 音楽家による捉えを中心に
3. 学会等名 日本保育学会 第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 横井志保・五十嵐睦美
2. 発表標題 How to capture children's musical expressions - Exploring from interviews with musicians-
3. 学会等名 THE PACIFIC EARLY CHILDHOOD EDUCATION RESEARCH ASSOCIATION 19th (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 五十嵐睦美, 横井志保
2. 発表標題 保育における子どもの音楽的表現に関する研究 - 「音楽する」子どもをどのように捉えるか -
3. 学会等名 日本音楽教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 横井志保
2. 発表標題 How children make sounds into music (2) Focus on a drumming expression with a company
3. 学会等名 Pacific Early Childhood Education Research Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 横井志保
2. 発表標題 幼児の音楽する身体について
3. 学会等名 日本保育学会 第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横井志保
2. 発表標題 Early Childhood Educator 's Thought About Musical Expression of the Young Children
3. 学会等名 Pacific Early Childhood Education Research Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横井志保
2. 発表標題 What are children doing music? -Grasping from a body and movement-
3. 学会等名 European Early Childhood Education Research Association 29th (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	五十嵐 睦美  (IGARASHI MUTSUMI)  (50782398)	桜花学園大学・保育学部・助教    (33932)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	高瀬 慎二  (TAKASE SHINJI)  (60565886)	名古屋柳城短期大学・その他部局等・准教授（移行）    (43926)	